

ハッピーハウスの  
夏休み



試し読み版

斐芝嘉和  
表紙イラスト：まとけち

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『ハッピーハウスの夏休み 前編』  
『ハッピーハウスの夏休み 後編』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

An illustration of two anime-style girls in school uniforms. The girl on the left has dark hair and red eyes, looking towards the viewer with a slight smile. The girl on the right has dark hair and blue eyes, looking slightly away. They are both wearing white short-sleeved shirts with blue collars and ties. The girl on the right has a name tag that says '原' (Hara). The background is a soft, warm-toned gradient.

夏休み  
ハッピーハウスの

斐芝嘉和  
表紙 / まとけち

## 登場人物紹介

### Characters

---

おぎわら めい  
**萩原芽衣**

主人公を「お兄ちゃん」と呼ぶ姪にあたる少女。快活で悪戯好きな小悪魔的な性格で、「お兄ちゃん」に憎からず好意を抱いている。

ゆずりはらまい  
**譲原舞**

同級生とは思えないほど落ち着いていて、お淑やかで上品な芽衣の友人。いかにもお嬢様といったどこか儂げな印象の美少女。

県道脇にある小さな広場に車を止め、急斜面に刻み付けられた獣道に等しい小径を四苦八苦して登ること、約一時間――。

「ぷはーっ！ 着いたあ！」

先頭を歩いていた芽衣めいが、麦藁帽子を放り投げながら大声で叫ぶ。と思つたら、ジーンズ地のホットパンツから伸びる小麦色の脚線美をしなやかに翻し、くるりと向き直つて、「お兄ちゃんつて、ひよつとしてバカ？ ペンションするには立地悪すぎだよ！」

幼さの残る頬をプクツと膨らめて偉おきわらそうに意見してきた。

俺をお兄ちゃんと呼んではいるが、萩原芽衣は本当の妹ではない。

俺の姉貴の娘、つまり姪だ。

姪っ子の名前が芽衣だなんて、ややこしいんだか簡単なんだかよく分からないが、とにかく――芽衣はショートカットの黒髪がよく似合う、クリクリした瞳が愛らしい、いかにもな元氣娘だ。

幼さの残る頬も、細く華奢な腕も、スラリと長い脚も――ほどよく日焼けして、健康的な小麦色に輝いている。胸はほとんど膨らんでおらず、尻はプリツと小さく丸い。黒いラニンングに襟切りの大きな白い半袖Tシャツを重ね着して、足元は大振りなボーダー柄のニーソックスにトレッキングシューズ。年齢の割に子供っぽい服装だが、言動も外見も子供っぽいから違和感はない。

「でも、素敵……」

——と、遠慮がちな小声で嬉しいことを言ってくれるのは、芽衣の友人・譲原舞ちゃんゆずりはらまい。胸も尻も芽衣と大差ないものの、同級生とは思えないほど落ち着いていて、お淑やかで上品で——ツバ広の白い帽子と純白のワンピースが実によく似合う、いかにもお嬢様風の、どこか儂げな美少女だ。

パフスリーブのワンピースは襟や袖口、胸元こそ白詰草のようなフリルでふんだんに飾られているが、ゴスロリというほど凝ってはいない。ふわりと広がるスカートなどはむしろ素っ気ないくらい。脚に絡まないよう膝の辺りを指で摘んで引っ張り上げているらしく、うしろから見ていると白い布地に小振りな美尻の形が浮いたり消えたりして眼福眼福——いやいや、なかなか結構な目の毒だ。

白いお嬢様のお尻ばかり見ているのもアレなので——と、視線を上によれば、濡れたように光り輝く黒髪は背の中ほどまで。サイドは半ばまで三つ編みにして頭のうしろへ回し、一見地味だがよくよく見ればかなりお洒落なバレットで留めて、残り半分を緩く広げながら垂らしている。

ふんわり膨らんだパフスリーブから伸び出す剥き出しの腕は眩しいほどに白く、瑞々しく華奢だ。スカートの下に見え隠れする脛も、スラリと長く伸びやかだ。

芽衣も舞ちゃんも、それぞれの個性にあった服装と言えよう。

ただ、いずれも山歩きには極めて不向き。

いつだって俺の話をロクに聞かない芽衣のせいで、軽井沢か白馬のような避暑地のペンションを想像していたらしい。

「なに言ってるの舞ちゃん、こんなの全然素敵じゃないよお！ 森の中の小さな白いペンションだって聞いたから、お洒落してきたのにいつ！ 虫がいるし、下生えは刈ってないし、坂は急だし……もう汗だくだく！ 詐欺よ、詐欺！」

「人聞きの悪いことを言うな、芽衣。森の中にあるつても本当だし、小さいとか白いとかつてのも嘘じゃないだろ」

ふたりの少女に続いて細い山道を登りきった俺は、背に担いだふたつのリュックサックを揺すり上げて自棄気味に言った。

俺たちの目の前にあるのは、確かに——青いスレート葺きの屋根と真つ白な下見板張りの壁が小洒落た、二階建ての小さな小さなペンションだ。

でもって俺はオーナーで、芽衣と舞ちゃんはふたりきりのお客さま。

夏休みでヒマだから、と姪っ子が友人を誘って泊まりに来たのだ。そしてこのふたり以外の客がやってくる予定は、いまのところ皆無。

三十路目前にして上司と喧嘩し、引っ込みがつかずに脱サラしてしまった俺は、家族からも愛想を尽かされてひとり家を飛び出すことになった。で、貯金を全額使つてこのちん

まりとしたペンションを購入した。

見た目が可愛いだけでなく、築三年だからどこも傷んでいないし、勢いで買った割にはなかなかよい物件だろう。唯一の問題は交通の便で——客はいままでわずかに二組、芽衣と舞ちゃんであろうやく三組目。そりゃあ前のオーナーも手放すわけだといまさらながらに納得し、実を言えば猛烈に後悔している。

（姉貴にまた、借りを作ってしまった……この分だと、一生頭が上がらないかも……）

ペンション購入で貯金を使い果たした俺は、姉貴夫婦に生活費を援助してもらってなんとか喰い繋いでいる状態なのだ。だから「夏休みに遊びに行く！」という姪っ子を断りきれず、こういうはめになっている。

「こんな山の中にポツンと一軒だけだなんて、聞いてないよ！」

「言った！ 絶対に言った！」

文句タラタラの芽衣に対し、俺はすかさず反論する。

姉貴経由で「よしたほうがいい」と、ちゃんと伝えたはずなのだ。拒む俺を押しきって半ば強引に押しかけてきたという自己責任を棚に上げ、勝手に膨らませていた乙女チックな妄想と厳しい現実のギャップに文句を言われても、困る。

「だいたい、駐車場があんなに離れていて大丈夫なの？」

「大丈夫。この辺りにはめばしい観光スポットもないから、あの県道、日に二、三台しか



通らないんだ」

「うわあ……やっぱり立地最悪ッ！　こんなところでペンションしようだなんて、頭おかしいんじゃない？」

「そ、そこまで言うか……？」

仲良く喧嘩している俺と芽衣の傍らで――。

「道は大変でしたけど……やっぱり、素敵です」

上品な仕草で汗を拭いつつ一息吐いた舞ちゃん、再び優しい言葉をくれた。顔を向けた俺と目が合うと、ニッコリ微笑んでくれる。

（く、ううう——ッ！　なんて可愛いんだ！）

生意気な芽衣とは大違いだ。

外見も素敵だが、それ以上に性根が優れているのだろう。氣遣わしげな表情や耳に心地良い声の響きが、俺のささくれ立った心をじんわり癒やしてくれる。

「ポーチもお洒落だし、広いバルコニーもあるし……ほ、ほら、大きな窓も可愛いわ！　こういうの、コロナアル様式っていうんですよね？」

細い腕を上げて俺のペンションのあちこちを指差しながら、小首を傾げ、清らかに爽やかに微笑みかけてくれる舞ちゃん。

可愛い——だけではない。

(こ、こいつ……こんなに巧かったか?)

このまま撫で回されているだけで、射精してしまいそうだ。芽衣に笑われるのは慣れているが、舞ちゃんの前でそんなみつともない真似は晒したくない——。

懸命に歯を喰い縛って膨れ上がる射精欲求を抑えていると、

「それよりほら、これ見て。この粘液——ほうら、糸引くでしょ？　これがいわゆる先走り汁、またの名を我慢汁」

なにも知らない清纯な美少女に説明するため、芽衣の指先が俺の鈴口からわずかに離れた。目を丸くし、頬を赤らめた舞ちゃんが、恐る恐る身を乗り出して俺の勃起男根に美しい顔を寄せる。

(う、わ、ああああ……)

ブルマ姿を拝めただけでも天国にいるような気分だったのに、まさか、そんな——真面目で大人しく淑やかな、白がよく似合う儂げな美少女が、おぞましく怒張した俺の淫棒をあんなに真剣な表情で見つめてくれるだなんて——。

恥ずかしくも嬉しい、複雑な気分。

やはりいけないことだ、やめさせなければ——と理性が叫ぶ一方、だからこそ背徳的な昂奮が水位を増し、これからなにをしてくれるのかと淫らな期待が膨らんでしまう。

「匂いを嗅いでみて……どう？」

「……うっ!! ほ、本当に、青臭いのね……」

細く優美な眉を嫌そうに歪め、柔らかな頬を強張らせる舞ちゃん。

普通の状況で舞ちゃんみたいな美少女に「臭い」と言われたらショックだろうが、この状況なら別だ。

(ああ、ああ……なにも知らない舞ちゃんが、純真無垢な美少女が……)

俺のせいで穢れていく、大人の悦びを知ってしまう——。

倒錯的な快感もさることながら、限界以上に勃起した淫棒にふわ、ふわ、と吹きかかる少女たちの生温かな吐息が、痺れるほどに気持ちイイ。

白く瑞々しく細い顎や、横から見ると美しさが際立つすつきりとした鼻や、薔薇の花びらのように紅い唇が——厳めしくエラを張った肉傘に、いまにも触れてしまいそうだ。

もし、いま、触れられたら——。

舞ちゃんの可憐な唇に、軽くプチュツとキスなんかされたら——。

「ああ、ダメ……や、めてえ……ッ!」

弾ける快感を想像しただけで果てそうになり、ベッドに括りつけられた身体を揺すって必死にもがく俺。

「ほ、本当に大丈夫なの、芽衣ちゃん? お兄様のお顔、あんなに紅い……」

「ああ平気平気……でもないか。急いだほうがいいかも」

意地の悪い笑みを深めた芽衣が、心配そうな顔をしている舞ちゃんの手を取り、無遠慮に誘導して――。

「え？ え？ な、なに……」

「もちろん、さつきみたいに握るのよ。今度は舞ちゃんが、ひとりで」

「……ッ!？」

「大丈夫、噛みついたりしないから。ギウツと握ってあげて。お兄ちゃんも、そのほうがいいわよね？」

芽衣に訊かれた俺は、機械仕掛けのように何度も何度も肯いた。

もう、声を漏らす余裕もない。必死に歯を喰い縛って下腹に意識を集中していないと、びゅくびゅく噴いてしまいそうなのだ。

「で、では……い、いきます……えいっ!」

目を瞑って横を向き、可愛い気合声を発して、俺の淫棒を握る舞ちゃん。

(くう、おおお——ッ!)

鋼のように強張った肉茎に、しなやかに巻きつく細い指。

滾る牡肉にしつとりと密着する、柔らかくてひんやりとした瑞々しい掌。

淫棒の芯に溜まった精液が一気に沸騰、鈴口のすぐ裏側まで怒濤のように押し寄せてきた。危ういところでなんとか踏み留まったが——限界は近い。あとほんの少しの刺激で、

きつと臨界点を越える。

「両手で握って……うん、そう。で、親指を立てて、先端の紅い膨らみにソツと添えて」  
「うう、うう……ソウっ！」

気合の割にかなりソフトに、亀頭にヒタツと触れる柔らかな親指。

穢らわしいと思っているのか、それとも怖がっているのか、舞ちゃんの手指はものすごく緊張している。芽衣に触れたときのような、抗いがたい肉悦はないが——その代わり、本当になにも知らない、純真無垢な美処女に触れられているのだという実感が、胸の奥からふつふつと込み上げてくる。

「目を開けて、舞ちゃん。自分がなにを握っているのか、ちゃんと見るのよ」

「く……あっ!! あ……あああ……」

芽衣に唆された美少女が、薄目を開けて己の手元を見遣り——たちまち泣き出しそうな顔になって可憐にわななき始めた。

にもかかわらず——淫茎を握る華奢な手指から、力は抜けない。

むしろ、ギユ、ギユ、と繰り返し繰り返し締めつけを増して——。

「か、硬い……芽衣ちゃん、芽衣ちゃんッ！ お兄様のオチンチン、すごく硬いわっ！」  
初めて触れた牡肉の硬さに、改めて驚く。

「硬いだけでなく、太くて長いでしょう？」

「う……うん……両手で握っても、こんなに余ってしまう……」

「握ったまま、手を上下に動かしてみて。もつともつと長くなるわよ」

「え？ ほ、本当？」

意地悪な友人の嘘を真に受けた純真な美少女が、嫌悪と好奇心の板挟みになりながら、俺のペニスを両手でシコシコしごき始めた。

「ふあ……く、うううっ！」

予期していた以上の快感がいきなり湧いて、思わず呻き、身動きする俺。

だが、舞ちゃんの手はもう止まらない。

「な、長くなってる？ ねえ芽衣ちゃん、お兄様のオチンチン、長くなってる？」

「うーん？ どうだろう？ もつと早く動かしてみ……あ、親指はちゃんと亀頭に添えておいてね」

「キ……キト……？」

「亀の頭と書いて、亀頭。ほら、オチンチンの先に膨らんでいる、この紅い部分よ」

「うう……うッ!? こ、これが亀頭……なんかこれ……ヌルヌルしてない？ あ、あ、先つちよに、透明な滴が……お兄様の我慢汁が……」

謔言のように言った舞ちゃんが、なにを思ったのか、おずおずと前のめりになって勃起ペニスに顔を寄せた。

匂いを嗅ごうとしているのか、それともキスしたくなつたのか——。

（あ、ああ、待って、待って待ってッ！ いま、そんなことを、され、たらああっ！）  
叫びたいのに声は出せない。

「うう、ふう……ふうう……ねえ芽衣ちゃん、これでいいの？ お兄様のオチンチン、ど  
んどん硬くなるし、なんだかすぐく、熱い、し……」

いきり勃つ肉茎を握つた美少女の手は、ますます速度を増し、薄皮越しに充血した海綿  
体をシコシコ、シコシコ、シコシココココ——。

燃え出しそうなくらい赤らんだ亀頭に、舞ちゃんの美しい鼻が近づく。

わずかに開いた可憐な唇が、ふっとキスしそうな気配を漂わせながら接近していく。

「こ、この先から……出る、のよ、ね？」

おずおずとした声とともに、敏感な肉塊にふうう、ふうう、と吹きかかる、上擦つた吐  
息。細い肩を滑り落ちた艶やかな黒髪が、俺の腹や太股をくすぐり、手淫されている淫棒  
の快感と混じり合つて——。

「く、お、おおおっ！ ご、ごめん、舞ちゃああああんっ！」

叫ぶと同時、

——びゅくっ！ どびゅっ！ びゅくくっ！

怒濤の如き射精。

嬉しいけれどよく分からないことを言いながら、またアモツと啞え直す舞ちゃん。唇を締め、首を傾け、頬の内側の柔らかな粘膜で亀頭の先端を受け止めつつ、チユウチユウしゃぶりながら、無器用な舌を精一杯くねらせて――。

俺が教えたことを総動員し、一生懸命しゃぶってくれる。

まだまだ下手だが、十二分に愛情が込められ、そのうえ熱烈だから、技巧に走りがちな芽衣のフェラよりずつとイイ。

「く……お、ううっ！」

ぎこちなくくねった舌が、カリ首を掠めて裏筋にぬめった。

弾ける快感に身を振り、シーツを掻き巻くと――上目遣いの舞ちゃんと視線が絡む。

（ん？ なに、いまの表情……うわっ!! う、おおっ!!）

ぬちゃん、ねちゃんっ！

頭を引き気味にして口腔に余裕を作った舞ちゃんが、俺の顔色を窺いつつ舌を巧みにくねらせた。舌縁のプリツとした感触に亀頭のエラが弾かれ、舌裏のヌルヌルが亀頭の先端を掠め――そのたびに熱い衝撃が淫棒を走り抜け、小さく呻いてしまう俺。

「……むふ！」

さつきまで、ただただ必死にしゃぶっていただけの美少女が、頬を妖しく弛め、瞳に意地悪な光を点した。



(や……ヤバい？ ちよつとヤバくないか、これ……?)

気持ちよくなっているのに怯えるのは変だが、しかし俺は焦る。

この表情、この目の色は——芽衣だ。

俺の反応を窺いながら小憎らしいほど巧みに快感をコントロールする、あの小悪魔とそつくりな顔つきだ。

舞ちゃんみたいな美少女とエッチできるのはもちろん嬉しいが、それはあくまで、俺が主導権を握っている場合。芽衣とのエッチは気持ちいいけど、あとで悔しさも覚えてしまうわけで——いまここで主導権を舞ちゃんに握られると、あの悔しさが二倍になつてしまうだろう。

「ちよ、ちよつと待つて舞ちゃん、ええつと、その……そ、そろそろ顎が疲れたんじやないか？ 休憩しよう、休憩！」

慌てて言うのに、舞ちゃんは俺のペニスを咥えたまま小さく首を横に振る。

そして——むちよつ！ じゅちゅつ！ れちよんつ！

遠慮をすべてなくした、大胆なフェラを再開。

「ふあつ!! うお……く、ううつ!!」

頬の内側のヌルヌルに亀頭の額が撫で回され、裏筋を這い上がった舌がカリ首の左右にニルンニルンと擦りつけられる。柔らかな唇はますます強く肉茎に絡み、じゅちゅ、

ちゅちゅ、という卑猥な音も絶え間なく響き——。

「ン、ン……ぷはあっ！　いまのどうですか、お兄様ッ？」

「い……イイ……けど、どうしたの、急に巧くなって……ほわっ!？」

唾液塗れの淫棒が、舞ちゃんの柔らかな手に握られる。

ペニス自体、沸騰した血潮を溜めて燃えるように熱くなっているはずなのに——美少女の掌はしっとり汗ばみ、さらに熱い。月明かりでよく分からないが、頬も火照り、耳も真っ赤になっているようだ。

「なんとなくですが、分かりました！　要は、口全体を使ってこんな感じに……」

「くっ!?　おおっ!？」

俺のペニスを握り締めた美少女の手が、唾液にぬめりつつヌッチュクツチュと上下する。同時に親指を器用に使い、痛いほど張り出した亀頭のエラや、真っ赤に輝く肉瘤の表面を、絶妙な力加減で小刻みに撫でる。

「……すればいいんですね!？」

「そ、そう、そうだよっ！　そうだけ、どおっ!？」

「そっか……だから芽衣ちゃん、私に手淫をいっぱい練習させたんだ……」

「そ……それはたぶん、ちが……あっ!？　あふ……ッ!？」

俺の答えを待たず、舞ちゃんは再びペニスをアモツと啜えた。

初めのころのような戸惑いや羞じらいは、もはや欠片も残っていない。芽衣とそっくりな、小悪魔的な微笑みを浮かべて俺の顔を窺いつつ——じゅちゅっ！　ちゅちゅっ！　れちよん、ちゅちゅ……んっちゅ、ちゅ、じゅるちゅっ！

無器用ながらもすべての技術を総動員して、全身全霊のフェラチオを開始。

「くはっ!?　う、おお……き、気持ち、イイイ——ッ！」

閃く舌が亀頭を掠め、味蕾のザラザラと舌裏のヌルヌルが交互にカリ首を責めてくる。小さな頭の上下動はしきりに捻りを啜えつつ、鋼のように強張った淫茎に柔らかな唇を擦りつけ、擦りつけ、また擦りつけて——。

なにより気持ちイイのは、絶え間なく繰り返される吸引感。

尿道の中に渦巻いている精液を、無理矢理吸い出そうとしているような——。

なんとも新鮮な快感だ。俺を焦らし、苦しそうに呻く姿を愉しんでいる芽衣は、こんなにチュウチュウ吸ってくれないのだ。

（ふえ、フェラって……こんなに、気持ちイイ、ものだったのかっ!?)

手淫や素股とはもちろん違うし、膣に挿入れたときとも全然違う。

それぞれの肉悦を足し合わせ、掛け合わせたような——比較できない気持ちよさ。

俺の腰に覆い被さった舞ちゃんの小さな頭が上下するたび、射精欲求が膨れ上がる。甘酸っぱい香を振り撒く艶やかな黒髪が、月光に輝きながら揺れるたび、限界が容赦なく近

づいてくる。

じゅちゅ、ぬちゅ、じゅるちゅっ！

れちよん、ねちよん、にゅちゅ……にちよんっ！

呻いてもがく俺の表情が、どんな言葉よりも的確なガイドになっているのか——舞ちゃんの舌遣いからぎこちなさが消えた。俺が感じる場所を巧みに探り当て、首を捻ったり微妙に上下させたりしながら、舌の当て方を変え、滑らせ方や這わせる部分を工夫して、さらなる悦びを次々と産みつけてくる。

「ンあ、ンちゅ、ンじゅ……つちゅっ！ ろふおれふふあ、おにいふあま？」

「い……イイツ！ すぐイイ！ オチンチンが溶けちゃいそうだ、芽衣なんかよりずっと、ずっと……イイよおっ！」

御世辞ではなく本心だ。

舞ちゃんが好みの美少女である点を差し引いても、こんなに気持ちのよいフェラは生まれて初めて。

できることならこのままずっと、しゃぶっていて欲しい——が、もちろん無理だ。

ペニスの根元に渦巻く熔岩はすでに限界を超え、舞ちゃんに舐めしゃぶられている淫茎の芯に充満しきっている。

あと少し、もうあとほんの少しで嘔いてしまおう——。

もつと感じていたいの、もつともつと感じていたいの——。

「うう、ああ……ま、舞ちゃん……お願いがあるんだ、聞いてくれる、かな？」  
 狂おしいまでの射精欲求にせつつかれ、俺は震える声を絞り出した。

「ン……ンあ？」

キョトンと首を傾げつつ、仔犬のような瞳で俺の顔を見つめる黒髪の美少女。

ああ、なんて可愛いんだ、どうしてこんなに無垢そうなんだ——ッ！  
 穢れなき美少女を、自らの手で穢す悦び。

背徳的な本能に衝き動かされた俺は、

「ま、舞ちゃんの、口の中、に……出し、たい……く、うう……俺の精液を、の、の……  
 呑んで、くれえっ！」

「えぶっ!! ン、ンううっ!!」

驚いて飛び退きそうになった美少女の小さな頭を、両手でガチッと押さえてしまう。

ああいけない、こんな乱暴なことをしたら舞ちゃんに嫌われてしまう——頭の隅で思っ  
 ても、もう止まらない。

「舞ちゃん、舞ちゃん、舞ちゃああンッ！」

「むおっ!! むぶ、むううッ!!」

呻き泣く美少女の頭を激しく上下に揺さぶり、狭い喉をグポグポグポ。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**